



## 高齢者110番の家

「介護甲子園」の広報誌『介護応援隊』には、「理事長左が行く、介護施設探訪」という企画がある。

「高齢者110番の家・地域食堂」きたほっと〜自分たちの地域と

趣旨に賛同した一般家庭や企業が、介護に関する「駆け込み寺」であることを示すシールを貼って、

高齢者や家族の悩みを受け入れる活動である。

シールが貼られた家では、介護を必要とする高齢者や家族、認知

も異常なく、身寄りもなく福祉の相談の場合、地域包括支援センターへ連絡——など。

北見市内の400軒ほどの家や事業所に「高齢者110番の家」のシールが貼られている。また、地域

食堂「きたほっと」は、その活動拠点であり、月に2回のオープン時には、食堂としてカレーやコーヒー

を250円以下の安価で提供するとともに、相談も受けつけている。

狙いは「向こう三軒両隣」の関係をつくること。「きたほっと」には、絵手紙を書きにくる人がいたり、音楽や踊りの発表の場になるなどに

ぎわいが生まれた。「絶対に他人を束縛しない」ルールが、地域住民に心地良い空間を届けているという。

## 遠慮近憂

と

主宰塾の1つ、トップ塾の受講者に「高齢者110番の家・地域

食堂「きたほっと」を読んだ感想を求めたところ、広島県福山市からレポートが届いた。

「地域包括ケアの要諦は、個別支援の質にあることと同時に、地域支援やまちづくりの観点における

住民参加がより重要であると考え

る。だが、住民参加が実は殆ど進んでいないことに、我が国における地域包括ケアが進展しない理由

を見ることが出来る。この困難なテーマを乗り越える実践であること

とが、本事例の最大の魅力であると捉えた。(中略)また、多様な人々

同士が、地域のなかで、他者に対する理解と慮り(おんが)を果たさなければならぬ。認知症や障がい者、不登校、貧困などの暮らしに困難

のある人々の暮らしと存在を、身近なものとして捉え、ひいては自らのことと実感してもらうために、地

域住民の意識・感情・行動の変容を射程においた実践を私たちに求められている。(中略)方法は数

多くあるが、地域住民が活動に参加することを如何に実現していくのか? 実践領域では、このこと

にこそ多くの困難を有するものと考えている。この困難を克服する一つの有力な実践方法を本事例は

示している。これを「遠慮近憂」として読んで、「遠慮近憂」の

出典として知られる「人遠慮無ければ、必ず近き憂い有り」\*の「論語(衛霊公15)」が頭をよぎった。慮

る力を大事にしたい。

転期に立つ経営の視座<sup>③</sup>

## 人遠慮無ければ必ず近き憂い有り

命を守るため、草の根運動を続ける」と、ある塾生の取り組みが『介護応援隊』で紹介された。

「高齢者110番の家」は、2012年3月に北海道北見市で発足したボランティア団体だ。介護業界関係者が10社程度参加している。

同誌によると主な取り組みは、

症の方が駆け込んだときに、次の対応を取っている。

①認知症の方の住所が分かる場

合には家族へ連絡、②自宅も不明で自宅へ戻ることが困難な場合に

は警察へ連絡、③福祉の相談場所が不明なときには、担当する地域

包括支援センターへ連絡、④体調

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。『介護ビジョン』編集委員。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に「99の言葉の杖」(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人材創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ! 経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

<http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

\*「先々のことまで考えて行動しないと、禍は身近なところからやってくる」という意